審査結果の要旨

氏名　保坂　亨

我が国における不登校論議は、従来、主に「学校基本調査」（文部省）の数値をもとに展開されて来たが、その数値が実態を正確に反映しているかについては、しばしば疑義が呈されてきた。本研究は、先ず、この調査の正確性を、ある市の全公立小・中学校の長期欠席者全員の指導記録の点検を通して綿密に検討し、その過程で得られた新しいデータをもとに、長期欠席・不登校と学校環境との関連の解明及び長期欠席・不登校を切り口にした学校教育の再吟味を行ったものである。

まず序章で、これまでの不登校研究の問題点と本研究の目的を提示した上で、第１部、第１章では、ある市の全公立小・中学校（約１７０校）における長期欠席者全員（約 14000 人）の学級担任の指導記録を９年間(1989-97 年度)にわたって点検し、不登校児童・生徒数の実態が「学校基本調査」の数値よりもはるかに多く、また、長期欠席全体の数が不登校の実態を反映したデータに近いことを指摘し、第２章では、長期欠席者の追跡調査の結果をもとに、連続長期欠席者が（文部省調査とは逆に）増加しているという深刻な実態を明らかにしている。

第２部では中学校の長期欠席・不登校の出現率と学校環境の関連を探究し、先ず、第３章では、長期欠席の出現率が学校環境の特徴と深く関連していることを事例をあげて明らかにし、第４章では、長期欠席の問題に取り組んだ二つの中学校を取り上げ、教員間の同僚性の形成をもとに、不登校生徒への教育相談活動、学習不振児への学習指導、学級活動の活性化等を含む包括的な学校改革を行った学校において、不登校問題への取り組みの効果も高いことを明らかにしている。

第３部では、長期欠席の要因として、学校の位置付け（第５章)、学校環境の流動性（第６章)、子どもの仲間関係（第７章）の３つの要因を取り上げて、長期欠席の背景を検討し、学校の聖性・自明性の喪失と脱落型不登校の増加、教員の異動のサイクルと長期欠席・不登校の出現率の関係、仲間関係の形成に関する子どもの発達的様相の変化等の観点から長期欠席の増加の背景を考察している。

本研究は、長期欠席・不登校の実態を大規模且つ綿密な調査によって明らかにし、且つ長期欠席者と学校環境との関係の探究を行った、我が国で初めての本格的な調査研究である。特に、綿密な調査をもとに、実質的には長期欠席者全体を不登校と見なすべきであるという観点を提起し、長期欠席者の出現率と学校環境の関係や、不登校問題への取り組みの有効性を個別事例に即して明らかにした点で、不登校問題に関する貴重な知見を提供している。よって、本論文は博士の学位の水準を満たすものとして評価された。